

多元性に着目したPerson-Centered self理論の新たな展開 : Configurationとは何か

著者	中田 行重, 斧原 藍, 白崎 愛里
雑誌名	関西大学心理臨床センター紀要
巻	9
ページ	95-102
発行年	2018-03-15
URL	http://hdl.handle.net/10112/13095

多元性に着目した Person-Centered self 理論の新たな展開 ～ Configuration とは何か～

関西大学大学院心理学研究科 中田 行重
関西大学心理臨床センター 斧原 藍
近畿大学医学部附属病院 白崎 愛里

要約

Rogers のパーソナリティ論は、治療論とセットになっており、自己 (self) が体験とどのように関係するかが重視される。本稿は Rogers の self 理論を多元的に発展させた Mearns の configuration という概念を紹介し、考察を加えるものである。Configuration とは、(前) 象徴化された感情・思考・行動の一貫したパターンであり、いくつもの configuration の総体が self であるとされる。他者からの取り入れや自己不一致の周辺にも configuration は発生し、同化・自己成就・再構築を繰り返しながら発展し続けると Mearns は考える。多元性や流動性を強調した視点は、Th の CI 理解や受容を助け、実践面での貢献は大きい。しかし、configuration という概念が却って CI への見方を固定化させてしまう危険性があるなど、Th が留意すべき点もある。

キーワード：configuration、part、self、Person-Centered

1. はじめに

Rogers の理論のうちでは必要十分条件 (1957、1959) がセラピーに直結するものであるため、パーソン・センタード・セラピー (Person-Centered Therapy、以後 PCT) の実践・研究者の中ではそこに関して議論がなされがちである。しかし、その 1959 年の論文に端的にまとめられているように、Rogers の治療論はパーソナリティ論がセットになったものである。必要十分条件にしても、自己概念と経験の一致/不一致や価値の条件等の概念を合わせて読むことで、その理論的基盤が理解できる。

そのパーソナリティ論は、多くの人格理論と違って、タイプ論ではなく、self (自己) が現象学的体験の中心にある幼児期から、次第に他者の肯定的配慮 positive regard を求めて体験

から離れていく経過を説明したものである。そして、無条件の肯定的配慮をセラピスト (Therapist、以後 Th) から受け続けることを通して再度、self と体験との合致部分が増加することを論じている。そのほか Rogers の “becoming a person” や、“十分に機能する人間” など、同じように self が体験とどう関係するかを論じているように、Rogers の中では self についての論考は重要なものである。

ところが、self と体験という 2 つを想定した Rogers の図式では、それが不一致の状態においては、self は、価値の条件付けを受けた良くないものであり、体験の方は純粋で良いものであるかのような、二項対立的な構図になってしまう。昨今こそ、精神病理学が一部で議論されるようになったが (例えば Joseph & Worsely, 2005)、元々、精神病理学を持たない PCT では

クライアント (Client、以後CI) の主訴や症状は、体験と一致していないという意味で一方向的に self だけの問題とされてしまう。しかし、果たしてそうなのか？ あるいはまた、もしそうならば、self はどのように問題になるのか？ このことは今までに PCT の中で論じられることがなかった。

本稿は、Rogers の self の理論を前に進めた Mearns, D. による configuration の理論を紹介し、その有用性や課題などについて若干の検討を試みるものである。

なお、configuration とは直訳すると「構造・配置・形態」であるが、現時点では的確に表すことのできる日本語が見つからないため、本論においては「configuration」とそのまま使用する。

2. The nature of “configuration” within self (2000) の紹介

“configuration” の紹介

以下は、Th と Jim (CI) の2回目のセッションのやりとりである。1回目のセッションの後、Jim に何が起こったのか、について述べられている。

Jim : 「前のセッションであなた (Th) は、僕の中のある“ガードマン”という part (部分) の後ろにいる、他の様々な part と出会いましたね。僕はあなたを自分の内側へと招き入れたんです。僕はこれまで、“ガードマン”を通してしか、人と話したことがなかったんです。僕の中にある他の part の一つには“ろくでなし野郎”という part があります。彼は人々から受けた様々な中傷に対して、非常に怒っている part です。でも、“ガードマン”はその part を外には出させません。怒る代わりに、暖かく微笑むようにと教えるのです。私の中の“ろくでなし野郎”は、あなたが僕の中に入って来たことに、恐れてはいたけれど、喜んで

もいました。あなたは、僕の中の“悲しくて孤独な part”に触れ、彼は今でもその触れられた感じを抱えています。

僕は1週間混乱していました。前進と後退を繰り返し、興奮と恐れを抱いた、小さな男の子のような感じでした。自分の内側にいる他の part が更に出てきており、“ガードマン”はこの状況が危険だと分かっていました。」

CI の言う part を、本論では configuration と呼ぶ。configuration とは、仮説上の構成概念である。個人によって象徴化された、あるいは、前象徴化された感情・思考・行動の一貫性のあるパターンのことを指す。そしてそれは、直接観察できる独立した存在ではなく、その個人による記述によってのみ推論され得るものである。個人によって象徴化されたと言ったが、ここに Person-Centred の特徴がある。私たちは CI と共に、CI が現在気づいていること、あるいは気づきかけていること (coming into awareness) を取り扱うのであって、いわゆる無意識と呼ばれるものは扱わない。

Th と CI の間に深い関係性 (relational depth) ができると、それまで表面的に適應していた part は退き、CI は自己の気づきの辺縁 (the edges of awareness) を安心して探索できるようになる。Th は、CI の全ての part に深い関係性で出会おうとする、出会うことのできる人である。

CI は説明的あるいは比喩的な言葉を使うことで、configuration の象徴をありありと表すことができるようになる (例えば、先の例でいうと Jim は「ガードマン」「悲しくて孤独な part」などと説明した)。configuration を表すのに、異なる CI でも似たようなラベルを使うことがあるが、表している内容は一人一人違うため注意深くその意味を聞く必要がある。

self とは、configuration の複合体である。創造性と自己保護の葛藤の中で、様々な configuration が共存している。Th の課題は、part の声

一つ一つを聴くことである。他方、多くの複雑な configuration から成る self (全体) にも、私たちは気づいている。これは、複雑な“家族”に例えると良いかもしれない。configuration を扱うセラピー過程は、PCT の家族療法とよく似ているのである。

“configuration”は新しい言葉だが、その現象は以前から言われてきたことである。他の心理療法でも、“self における part”は様々に理論づけられてきた。例えば対象関係論的にいえば“重要な他者の取り入れ”、TA 的に言えば“自我状態”である。また、こういった一人の人が持つ複数の側面に関する指摘は、様々な哲学者や臨床家によっても議論されてきている。対話的自己論における“声 (Voice)”もその一つである。Jung のコンプレックスの考え方は、configuration に似ているところがあるが、詳しくみていくと Jung のコンプレックスの概念は無意識的な意味合いが多く、人格化の意味合いが少ないことがわかる。John Rowan は、configuration や part を記すのに、Subpersonalities という言葉を用いている。治療的なアプローチがほとんど違うのにもかかわらず、非常に似た現象に対して働きかけている。また、家族療法家の Schwartz のアプローチも configuration と関連がありそうだが、彼は“コア”セルフ、あるいは“リアル”セルフを強調している点で異なっている。私たちは、現時点では (全体を) “統治する” configuration があると想定しない。Th が“統治する” configuration があると予測すると、CI は予測に合わせてそれを作り出してしまふかもしれない。

Mick Cooper は、「Rogers の言う、自己概念の“激しい変動性 (violent fluctuations)”は、質的に異なる自己概念の間を環境に合わせて行ったり来たりすることができるという多元性を表しているように思える」と述べている。“configuration”と Rogers パーソナリティ理論とを統合させるにあたって、self の多元性に関する Cooper の提言の意味は大きい。

Margaret Warner の言う“解離したプロセス”もまた、self の中にある“part”であり、configuration の考えと類似している。注意しておきたのは、これらの configuration と解離性同一性障害とは質的に異なるということだ。

取り入れ (introjects) の周りに築かれる configuration

“取り入れ (introjection)”は精神分析に始まり、あらゆるセラピー理論の共通知識として受け入れられている。PCT において、取り入れとは、外部からもたらされた評価であり、self の一面を定義づけるものとして象徴化される。それは、私たちの体験から生み出されるものではなく、不可解に心に現れてくるものである。取り入れによって、自己定義が促進されたり、self 内にある part が保護されたりする。取り入れは、“予言の自己成就”効果を通して、取り入れたものを支持するように、自らエビデンスを積み上げていくのである。ある CI は言う、「私は自分が魅力のない人間だと信じていたので、魅力がない人として振る舞っていた。魅力のないように見せようとさえしていた」と。

多くの場合、取り入れは、その人の社会的なイメージとして、ポジティブに述べられる (例えば、「私は一生懸命物事に取り組む」「私は温かくてフレンドリーだ」など)。ポジティブな取り入れが支持されると嬉しく感じるだろうが、一方で同時にそれらは体験が制限される。つまり「一生懸命取り組まなければならない」あるいは「温かくてフレンドリーな人でいなければならない」といった、苦難にもなり得るのである。

また時に、極端でいささか非現実的なものもある (例えば、「失敗などあり得ない」「私は“プリンセス”だ」など)。configuration は、まるでおとぎ話のような非現実的な取り入れの周辺にできる。「プリンセスは常にパーフェクトでなければならない」、というような、おとぎ話に含まれているイメージやメッセージを主張する part があり、おとぎ話的 configuration は、セ

ラピーの初期に顕著となる。「完璧さ」を求めてセラピーに臨んだCIには、幸か不幸か、セラピー過程でおとぎ話は失われ、より冷たい現実がもたらされる。

他方、ネガティブな自己概念を、変化や変化の兆しから守る、ネガティブな取り入れもある(例えば、「私は失敗者だ」「私は価値がない」など)。人間存在についての最も冷たい皮肉は、人は変化する可能性に伴う不安定さよりも、ネガティブな状況を選び続けるだろうということだ。以下のJaneのケースを見てみよう。

私は自分が失敗者だった以前を思い出せないけれど、重要な場面で失敗すると予測するメッセージを繰り返し思い出します。学生時代、私はあえて成功しないようにしていました。楽勝な試験をすばやく解いていたら、終わりに近づいて恐ろしい冷や汗が出てきました。賞賛や父の皮肉なコメントや、成功し続けたいいけないプレッシャーやその後必ず起こる失敗の予告が聞こえ出しました。だから自分の正答を書き換えたのです。

このようなネガティブな取り入れによるダメージは大きく、永続的だ。しかし必ずしもself全体を汚染する訳ではない。取り入れ以前から存在していた他のパートは、異なるナラティブを伝え返し、生き残るだろう。新しくできていくpartも、たとえネガティブなメッセージに矛盾していたとしても、築かれていく。矛盾しているconfigurationも同時に存在できるように、selfの中である程度の住み分けがなされており、そのようなpart間の矛盾や不一致は、セラピーの中に現れてくる。自分のことを邪悪だと定義づけている人が、邪悪ではないpartに気づくこともあるだろう。part間の関係は、揺れ動きやすい。(part間の)不一致が改善されていくプロセスは、喜びだけでなく痛みももたらさるだろう。

いくつかの取り入れは、修復的な自己保護機

能によって、特に複雑化する。それらの取り入れは、configurationの中に盛り込まれており、そのconfigurationは、ネガティブな自己概念を守る必要があるまで、あるいは出ない限り、姿を現さない。人がある程度までは前進することを許し、その後、その人は失敗しなければならない、というのがこれらの巧妙な取り入れの周辺に築かれたconfigurationの特性である。

新人のThは、大幅な進歩を経験したように見えた後で、突然劇的な後退に陥るCIを見て、驚き混乱する。しかし、もしThがCIとともに深い関係(relational depth)のなかで従事していたら、そのようなconfigurationの保護機能を弱らせることができるだろう。

取り入れ自体が特に力を持っているわけではなく、(その周辺に)configurationを形作るための認知的、情動的、行動的な要素を積み上げていくことによって、より強力に自己定義を守ることができるようになる。もし、取り入れの周囲に築かれたconfigurationが、ネガティブな、傷つけられた自己概念を守るのであれば、それらのconfigurationは、ネガティブな自己概念を揺さぶるようなポジティブな体験から自分を守るだろう。社会心理学の言葉を借りれば、取り入れに基づくconfigurationは、selfの中の不協和(認知的不協和)を減少させる代替手段を提供すると言える。つまり、それらは変化することへのプレッシャーを減少させる。このプロセスはSallyの例に表れている：

「失敗しなければならないなら、成功を考えることは恐ろしいことです。」この短い文に、CIであるSallyの衰弱が象徴されており、彼女の毅然と立ち向かうに十分なほどの強さも見て取れる。この気づきは、とらえどころのない25回目のセッションで訪れた。

24回目のセッションでは、Sallyは「一歩ずつ彼女の悪魔に直面し」、そしてそれらを彼女自身が追い払っているように見えた。そのセッションの後、私(筆者)は終結が近づいていると

考えていた。彼女は25回目のセッションに来ず、別日の予約をとってキャンセルし、私の折り返しの電話には出なかった。私はよくよく考えて彼女に手紙を書いていたが、11回目の試みの後、彼女のアパートを訪ねることにした。

彼女は驚いていた。突然の訪問は、彼女を守る part にとって想定外だった。Sally が語るには、「あなたが扉の前に立っているのを見てとても驚きました。見限ったと思っていたから一私逃げたしー。私は昔からよく知っていて、とても効果的な part に逃げ込んでいました。でもあなたはやってきて、そして文字通り私の扉をノックしたんですーもしあなたがこんなに遠くまで手を差し伸べることをいとわないなら、私はやっているといます。」

不一致体験の周りに築かれる configuration

self の発達論 (Rogers, 1951, 1959) の中で、Rogers は以下の2つの平行したプロセスを指摘している：

- 個人によって直接経験されたのではなく、自己構造の要素の中に取り込まれたもの
- 直接経験されたものでありながら、自己構造と矛盾するために自己構造から否認されたもの

ここまで取り組んできた“取り入れの周りに築かれる configuration” は1つ目のプロセスに関するものである。ここからは2つ目のプロセスに取り組む。

一元性の強調は、Rogers の時代の社会心理学に共通した論調であり、Rogers もこの枠組みに基づいていた。しかし、self を一つの統一された現象ではなく、複数の configuration の総体ととらえるならば、不一致は configuration の境界やダイナミクスによって許容される可能性があり、人間の体験をより豊かに描きだせるだろう。

ある男性は絵にかいたような禁欲的で凝り固まった自己概念を持っており、感情を露わにすることに否定的だった。ある晩、彼は激しく酒

を飲んではずすり泣いている自分がいることに気が付いた。これはおそらく self を守る代替手段だったのだろう。彼はこの体験を「単に酒のせいだ」とはねつけ、Rogers が言うところの否認によって self の統合を保とうとするかもしれない。しかしあるいは、彼はこの体験を self に受け入れるかもしれない。それは別の configuration に組み入れることによってである。そのため彼は認めるだろう。「私の中にとっても悲しんでいる part があることはわかっている」と。このような、self の他の part と不一致な configuration は、容易には人前に現されない。セラピーにおいてこの不一致に直面するならば、ハイレベルの安全が必要になる。これが深い関係性 (relational depth) が重要な理由の一つである。

「成長的な」 configuration と「成長的でない」 configuration

いくつかの configuration は、実現傾向の伝達手段としてあらわれる。そして成長に好ましくない状況にあってさえ、有機体の機能を高め、維持するための絶え間ない努力をする。現在の生活に行き詰まりを感じている CI も、おそらく成長傾向の周りに築かれた configuration を持っている。これらは、「生活のもっと外のことを求めている私の part」とか「安全じゃない私の欠片」というように表現される。これらは、無気力や萎縮と闘い、成長へと駆り立てる生きる力である。PCT の Th はこの成長的な part に耳を傾けることが得意だ。

PCT の Th に共通するミスは、成長的でない configuration に気づかないことだ。これらは「ただ丸まって何もしたくない私」や「この Th を壊してしまいたい私の欠片」といった形で表現される。成長的側面に焦点をあてすぎてバランスを崩すと、セラピーが停滞したり、治療的で成長的なプロセスがブロックされてしまうこともある。なぜならそれは条件付きの関係だからだ。成長は CI が全ての part に関われ、価値を置いて、耳を傾けるときに促進される。もし

Thが特定の part とのみ連携しているように見えたとしたら、追いやられた“成長的でない” part の破壊力はさらに大きくなることもある。

成長的でない configuration に注意を向けることは、PCTThにとって難しい挑戦だろう。しかし、このような part にも他の part と同じように高い水準の受容、共感、一致を示し、満たされた深い出会いをする。Thはこの part の存在や性質を理解するのはもちろんのこと、積極的に価値を置かなければならない。

問題の part に焦点をあててはいけないというのはメンタルヘルス業界でよく言われることだが、これは浅い介入をする専門家のためのものである。深い関係性の中で働く専門家にはこうした禁止事項はない。

Thが“成長的でない”側面をもっと理解すれば、よりそこに価値を置けるようになるだろう。セラピーを妨害しているように思われる part も、Clの人生の中で、Clの実存を高め、安定させ、危険から身を守る上で重要だった時期があったことは言うまでもない。セラピー期間には、この“成長的でない” configuration について、Clはしばしばジェットコースターのようなプロセスを経験する。はじめ彼らはこの configuration を破壊しようとする。その後それらをよりよく理解して、selfの中の長年の価値ある家族メンバーとして受け入れるようになる。

Configurationに関する person-centered 理論

この項では、これまで展開してきた理論をまとめらる。

もし、単一の貫した self だけに頼らなければならないとしたら、私たちが適応できる社会状況は極めて限られるし、人間同士の不一致の問題はさらに大きなものになるだろう。私たちは、変動し時に矛盾する内外の要求に直面する。その葛藤を単一の self のみで抱えようとすることは精神病の試みだ。selfの中の多元的な configuration を使って矛盾を住み分けることは、社会生活を営む上で非常に洗練された方略である。

困難に直面した際（それは多様で時に矛盾した価値の条件であるのだが）、人は self 全体ではなく、self の part を適応させる。これは、configuration の保護機能の一面である。価値の条件周辺に築かれた configuration によって、価値の条件に適応すると同時に、傷ついていない残りの self を保護することができる。Rogersは不一致な体験を扱う手段として否認のメカニズムのみを指摘した。しかしCooper (1999)は、代替的な保護機能が働き、これらの不快な体験は self の part の中に包み込まれると提唱している。

以下はRogersの13の提言の一部である：

行動は、いくつかの例においては、象徴化されていない有機的な欲求や体験によってもたらされるだろう。そのような行動は自己構造に矛盾するだろうが、そうした場合には、その行動は“所有されない”だろう (1951:509)。

私たちはこの13の提言に以下を付け加えたい：

いくつかの例においては、行動は“所有される”だろうが、それはselfのconfigurationかpartに割り当てられる。このようなconfigurationはおそらく他のpartとは矛盾し、そのためアクセスが制限されるだろう。

ここまで、取り入れによるconfigurationと、不一致体験に関するconfigurationという2つのプロセスを仮定し、検討してきた。しかし、これらはconfigurationの発達プロセスの初期に過ぎない。

一旦形作られたconfigurationは、他の近い一貫した要素を同化する。configurationは組織原理となり、個別の思考や、感情、体験に構造と機能を貸し与える。例えば、「人は信用できない」というナラティブをもたらすconfigurationは、最小限のエビデンスをもとに「愛されない」というメッセージに拡大するだろう。

さらに、configurationは自己成就性という性質も持つ。configurationは独自のナラティブを生み出し、その存在を確保する。例えば、失敗

者のナラティブを持つ人は、失敗を予測した行動をとり、それによって失敗の可能性を高めるだろう。

もし私たちの理論がこの地点にとどまっていたとしたら、不変の“対象”や“自我状態”を前提とした対象関係論や交流分析の理論と変わらなかっただろう。self 中の configuration は、精神的“かさぶた”のような永遠に区分されたものではない。part それぞれは、その保護機能をより効果的にするために、実存的に発達することを必要としている。この発達、configuration 同士の相互関係によって促進される。それゆえ、私たちは configuration の発達とダイナミクスの世界全体に扉を開く。

このダイナミックな発達と configuration の相互作用は、絶え間なく変わる社会の中で、関係しあって生きる人間 (a relational human being) として機能するために、非常に高度な手段を提供する。

3. 考察

configuration にまつわる Mearns の論は Rogers の self 理論を多元的に発展させたものであり、自己概念-純粹体験、社会的圧力-個人の成長といった二項対立ではなく、両者がバランスをとりながら相互に影響し合うという対話的文脈で PCT の人間観を再構築している。

まず configuration の発生としては、Rogers も指摘した“取り入れ”に関連した configuration のほかに、“不一致を包含する” configuration を論じた点が新規的である。冒頭で述べたように、Rogers のパーソナリティ論は価値の条件付けで説明される。Rogers は、自己概念とは一致しない体験は否認されるとしているが、Mearns は否認のメカニズムのみで説明するのは不十分だと考え、不一致の体験は他の configuration に包含 (所有) され、その configuration へのアクセスが制限されているということを強調する。self は単一ではなく configuration

の総体だと捉えるのである。

また、configuration は互いに同化したり、configuration 一つ一つに沿ったナラティブを積み重ねていったり、あるいは再構築していくことによって、発展し続けていくものとされる。Rogers の論をベースとしつつも、流動性が強調され、多面的な視点も新たに加わった考えであり、PCT の発展という意味で Mearns の貢献は大きい。

論文の最初の例を見ると、「ガードマン」「悲しくて孤独な part」など、self 内での役割がはっきりとしており、一見「私 (I)」を主張する文化である西洋的な理論のように思われる。しかし、日本でもサトウ・渡邊ら (2005) は、モード性格論という、これまでのような固定的な性格の捉え方ではなく「変化を基調とした性格の捉え方」を紹介し、日本の著名人を例に出しながら「人は状況に合わせていくつかの性格パターンを使い分けて生きている」と述べている。“複数の configuration の総体としての self” という見方と重なる部分が多く、configuration という概念は日本人にとっても有用であるように思われる。Th にとっては、多角的な視点を持つことで、CI をより豊かに捉え、より繊細に理解することができるのだろう。他方 CI にとって、このように自身を理解されることは自己概念の幅が広がり、自分で自分のことを認めていきやすくなるのではないだろうか。

一方、この概念を臨床に用いるには、留意すべき点もいくつかあると筆者らは考える。まず、CI の体験を part として捉えることによって、却って Th の CI に対する見方が固定化されてしまう危険がある。Mearns は configuration の流動性を強調しており、こうした固定化した見方や当てはめは configuration が本来持っている性質とは全く異なるものなのだが、「part (～な私)」というイメージは、特定の像を Th に (あるいは CI にも) 強く印象付ける可能性を持っている。Th はこの危険性に気づいておいて、自分の見方に CI を当てはめていないか常に警戒す

る必要があるだろう。

また、CIが part として表現していない体験をこの configuration の文脈でどう扱うか、という問題もある。Mearns は configuration を、その個人によって象徴化された、あるいは前象徴化されたものと述べており、part は無意識下に潜んでいるようなものではない。内外の相互作用を通して、その個人によってその都度組織化され、再構成されてくるものである。つまり厳密に言えば、configuration は CI が意識するまでは存在しない現象であるといえる。しかし、CI の体験を精緻に追いかけている Th であれば、CI から configuration の「可能性」を感じるということはありうるだろう。この可能性をどこまで利用するのか。Th が configuration を意識することで、Th の持つイメージに CI を方向付けてしまう危険性もある。例えば Mearns (2000) は CI が用いた「ウー！」という表現を、言語による象徴化がまだ洗練されていない self の part の例としてあげている。しかし、果たしてこの体験はその時 CI にとって「self を構成する part」として体験されていただろうか。「ウー！ という感じ」と「ウー！ という私」では体験の質は違ってくるだろう。Mearns は CI の self を Th が翻訳することの危険を指摘しており、configuration が象徴化される前段階においては、Th は、まだ self の part として洗練されていない CI の表現をそのまま用いる、と述べている。この主張には強く賛同するが、加えて、もしかしたら configuration になる「かもしれない」体験である、という態度も必要だろう。

先述したように configuration の概念を通してみることで、Th が CI をより深く理解できたり、それが CI への受容につながることもあるだろう。そうした意味で configuration という概念は臨床実践における有用性を持っている。しかし、特に CI が明確に表現していない configu-

ration は、事実ではなくあくまでも「可能性」である、CI が今ここで体験しているものとは違うかもしれない、という視点を同時に意識しておく必要があると筆者らは考える。

最後に、Mearns は「Further Theoretical Propositions in Regard to Self Theory within Person-centered Therapy (2002)」において configuration を含む独自のパーソナリティ理論をさらに洗練させているので、加えて紹介しておく。

文献

- Joseph, S. & Worsley, R. (2005) Person-Centred Psychopathology: A positive psychology of mental health. Ross-on-Wye: PCCS Books.
- Rogers, C. R. (1957) The necessary and sufficient conditions of therapeutic personality change, *Journal of Consulting Psychology*, 21(2), pp.95-103. (カーシェンバウム・ヘンダーソン編 (2001) : 『ロジャーズ選集(上)』伊藤博・村山正治監訳, 誠信書房, 152-161).
- Mearns, D. & Thorne, B. (2000) Person-Centred Therapy Today: New Frontiers in Theory and Practice, SAGE Publications Ltd, pp.129.
- Rogers, C. R. (1959) A Theory of Therapy, Personality and Interpersonal Relationships as Developed in the Client-Centered Framework. In S. Koch (Ed.) *Psychology: A Study of a Science, 3. Formulations of The Person and the Social Context*. New York; McGraw Hill. (カーシェンバウム・ヘンダーソン編 (2001) : 『ロジャーズ選集(上)』伊藤博・村山正治監訳, 誠信書房, 152-161).
- サトウタツヤ・渡邊芳之 (2005). 「モード性格」論. 紀伊国屋書店.